

倭国 (九州王朝) から日本国 (大和朝廷) へ(2) 誰も知らなかった倭姫王の生涯 — 薩摩で生涯を終えた倭姫王と倭国最後の王 —

大宮姫 (倭姫王) に知らされた天智崩御

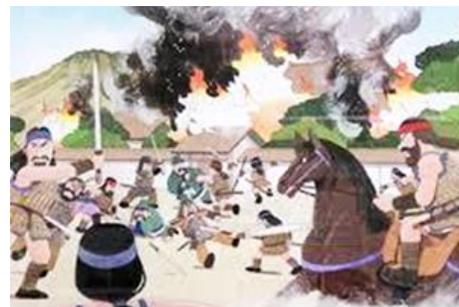


薩末姫 (倭姫王) の反乱 大宮姫の故地



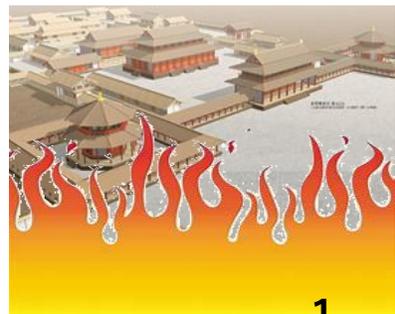
大宮姫 (倭姫王) 薩摩に帰る

薩摩隼人の乱



大宝元年の文武の式典

壬申の乱



朱鳥元年難波宮焼失

前回までのまとめ：白村江敗戦から王朝交代までの経緯と倭姫王

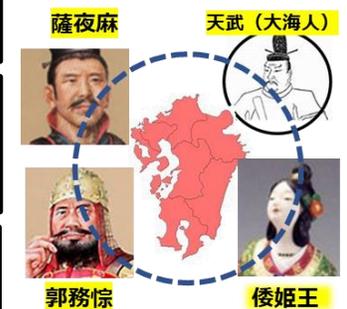
①筑紫君薩夜麻は663年の白村江敗戦で捕虜となり、665年の唐高宗の封禪の儀に「**倭国酋長**」として扈從。**羈縻（まび）政策により唐の都督倭国王となり**、667年11月に唐の郭務悰と数百人の唐人（兵と官僚）、捕虜遺民らとともに**筑紫都督府に帰国**。以後唐の駐留の下、**筑紫都督倭王**として、**都督府**で政務を執る。



②ヤマトの天智は薩夜麻不在の間、近江で政務を執る。**668年九州王朝の姫倭姫王を娶り、その権限の下に**、「唐の都督となった薩夜麻」と別に**九州王朝系近江朝のトップとして**、(668)白鳳中元に改元・近江令制定、(670)国号を日本と改める・庚午年籍制定など、**倭国全般の政務を行う**。



③天智は671年に崩御。その際**大海人は倭姫王を天皇に推戴**せよと主張するも、大友が後継者となり、**大海人は九州の吉野に逃れ、薩夜麻と唐に支援を求める**。同時に倭姫王（大宮姫）も近江を逃れ九州に帰還。



④唐郭務悰・都督薩夜麻は九州王朝系**高市皇子**を司令官に大友を攻め近江朝を滅ぼす。これで羈縻政策通り**薩夜麻が都督倭国王として倭国（九州王朝）全体を支配**、天武は臣下No.1として大和の王家の天皇に即位。

⑤**677年に新羅が半島全体を掌握し、唐は半島から撤退**。これに合わせて**倭国駐留使節や軍も九州から撤退**。都督薩夜麻は唐の軍と権威という後ろ盾を無くす。これに筑紫大地震など天災が加わり倭国（九州王朝）は衰退し、これに代わりヤマトの王家は影響力を強めていく。



⑥**686年に難波宮が焼失**。同年に天武と薩夜麻、大津皇子が相次いで逝去。689年には草壁皇子が薨去する。**難波宮に代わる藤原宮の造営が持統の手で行われるが、ヤマトの王家と九州王朝双方の継承権者の高市皇子も696年に薨去**。持統主導で**文武が即位し、政権は九州王朝から大和朝廷へと変わっていく**。



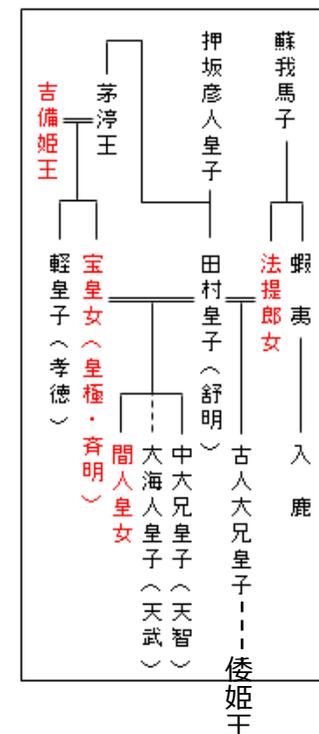
今回は通説では誰も注目しなかった「**倭姫王**」の生涯を、『薩摩開聞故事縁起』の**大宮姫**の生涯と、『続日本紀』で大和朝廷に反旗を翻した**薩摩姫**の記事をもとに述べていく。

『書紀』に記す天智の皇后の「倭姫王」

天智天皇は668年1月の即位翌月に「倭姫王（やまとひめのおおきみーわのひめおうきみ）」を「皇后」とする

- ①天智即位：『書紀』天智7年（668）正月戊子（3日）に、**皇太子、天皇に即位す。**
- ②倭姫王を皇后に：『書紀』同年2月戊寅（23日）に、**古人大兄皇子の女倭姫王を立てて、皇后とす。**

天智は即位の前に多数の嬪（みめ）を娶り、中でも遠智娘（をちのいらつめ）は天武妃となる大田皇女、持統天皇となる鸕野皇女を産んでおり、姪娘（めいのいらつめ）は元明天皇となる阿倍皇女を産んでいる。天智の後を継いだ大友皇子の母は**伊賀采女宅子娘（やかこのいらつめ）**。彼女らを差し置き古人大兄の娘の倭姫王を皇后としている。⇒古人大兄は大化元年に謀反の罪で子供共々殺され、妃**妾自経（わななき）**で死んだとされており、『書紀』に記す倭姫王の「出自」は極めて怪しい。



天武は天智没直前に「倭姫王」に即位を勧めている 皇后どころか天皇になれる人物とされる

『書紀』天智10年（671）10月庚辰（17日）（大海人）請ふ、洪業（ひつぎ）を奉（あ）げて大后に付属（さず）けまつらむ。（「天武即位前紀」陛下、天下を挙げて皇后に附（よ）せたまへ）

⇒天智即位と倭姫王を娶るのは「一体」で、かつ倭姫王は皇位を承継する十分な資格を有することを意味するが、これほどの地位にありながら、その後の「倭姫王」の消息は記されず、生没年も不詳とされる。

「倭姫王」に相応しい人物が九州におり、近江朝で天智の後となったとされる

鹿児島指宿の開聞岳の麓に薩摩一の宮の「枚聞（ひらきき）神社」（鹿児島県指宿市開聞十町）があり、その縁起等を記す『開聞古事縁起』に、枚聞（開聞）大神とされる「大宮姫」の伝承が記されている。

『縁起』で、大宮姫は白雉元年（650）に薩摩の磐屋で誕生し、僧の智通に育てられ、太宰府に奏上して2歳で都に上る。その後近江の宮に遷り天智の皇后となった。



薩摩『開聞古事縁起』の「大宮姫」

650年薩摩生まれ。651年太宰府経由で入京。668年19歳で天智の皇后に。671年大友に追われ薩摩に帰国

一、（開聞神御誕生之事）孝徳天皇白雉元庚戌（650）春2月18日辰刻。産名を瑞照姫と称し奉る。一、開聞神二歳入京之事《陸地ヨリ御上洛》：そもそも開聞神女は磐屋に降誕され、智通と仙翁と草庵に敬育す。往時、太宰府《又八都督府ト》に奏し以て上都を告ぐ。此に宣に依り二歳にして入京す。

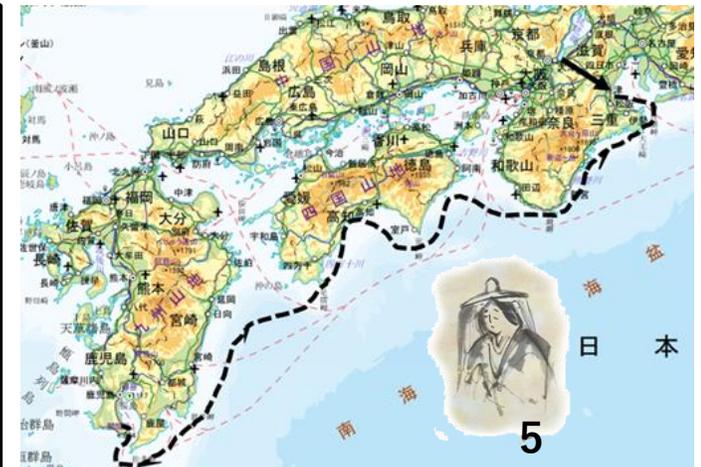


⇒薩摩で生まれ「陸地ヨリ御上洛」とあるから651年に太宰府を經由し入京。『書紀』651年末に天皇の難波宮遷居記事があり、652年は九州年号白雉元年で改元式が挙行され、9月難波宮完成だから京＝難波宮に入ったと考えられる。

一、同十三歳立皇后宮事：時に壬戌年（662）天智天皇即位*668年か。同帝四乙丑年（665）鎌足を大織冠とす。同六丁卯年（667）南都朝倉都を迂（まわ）り、近江州志賀に都す。（*『書紀』記事どおり。『海東諸国記』では白鳳元年（661）近江遷都とする）前乙丑年（665）前の皇后（孝徳の皇后「間人大后」）薨る。茲（ここ）に依り大宮姫を立て皇后宮（きさいのみや）としたまふ也。⇒662年は天智称制即位、天智即位は668年。倭姫王を皇后とするのも668年。従って「668年19歳で立皇后」となる。

大海人の勧めで壬申の乱直前の天智10年（671）11月に近江宮を逃れ薩摩額娃（えい）郡に帰国

その後、大宮姫は宮廷で「難事」にあい、大海人（天武）は生土（生地）の薩摩に帰るよう告げる。姫は、伊勢参拝を理由に暇を願うが天智は許さず。天智10年（671）11月4日に許されて伊勢に出立。◆浄御原天皇（大海人・天武）此の難事を聞き深く歎かれ、秘に皇后に、「此に皇后若し恥有らんや、私（ひそか）に生土の所に帰らむと欲しめせ」と告ぐ。（大宮姫）伊勢参宮に言寄せて、御暇を乞う。帝（天智）許さず。（後に）宣可あり。時は天智天皇10辛未年（671）冬11月4日秘に下向す。（是に、大友皇子兵勢を催し、大宮姫を弑せんと欲し、衆兵を路次にめぐらす。）⇒大宮姫が大海が即位を勧めた倭姫王であれば、大友からは大海人とともに後継者争いの敵で弑せんと欲するのは自然。天智は12月3日に崩御。



大宮姫（倭姫王）の九州帰還と天智崩御の告知

薩摩帰還後の大宮姫

672年2月に薩摩帰還。673年から30余年薩摩で暮らし708年に59歳で薨去

已に勢州安濃津に着く。・（薩州御着岸之事）布帆御恙なく、終に翌天武帝**白鳳元壬申（672）冬11月4日薩州穎娃（えい）郡山川牟瀬浜に着きたまふ。**

⇒**11月4日は伊勢下向日（但し671年）**。2月4日に開聞岳の麓に到着とあり、672年春に離宮宮構とあるので、薩摩到着は672年2月と考えられる。

一、（御嶽麓離宮宮構之事）時に**白鳳元壬申（672）春宣下に依り、九州諸司、此の地に離宮を宮構**す。一、（入御于離宮之事）神嶽之離宮に御入なり。時に天武白鳳2癸酉（673）夏5月5日なり。此の仙土に於いて離宮を為し凡そ30余年なり。呼びて之を外域と云う。**九州の貢物を奉進するは當離宮と太宰府なり。**

（元明帝和銅元戊申（708）6月18日皇后御寿59薨御（650年～708年）



飾られた郭務悰の天智への弔意表明

本来は天智皇后倭姫王（大宮姫）への連絡と姫の弔意

672年2月九州帰還ののち天智崩御の知らせが筑紫に届く。⇒12月薨去で知らせが何故3月か？

◆『書紀』天武元年（672）3月己酉（18日）に、内小七位阿曇連稻敷を筑紫に遣し、天皇の喪を郭務悰等に告げしむ。是に、郭務悰等、咸（ことごとく）に喪服を着て三遍擧哀（みねたてまつる）、東に向いて稽首（おが）む。壬子（21日）、郭務悰等、再び拜みて書函と信物を進る。⇒郭務悰の篤い弔意は**不自然**：「百濟禰軍（でいぐん）墓誌」では近江朝を「日本の残党は扶桑に拠り罪を免れようとしている（日本餘嚙、拠扶桑以逋誅）」とあり、郭務悰が「残党」に手厚く弔意を示すのは不自然。これは「天智を飾り立てる」潤色で、**本来は2月に九州に帰還した「皇后」の倭姫王への知らせと、倭姫王の弔意表明と考えるのが自然**ではないか、「等」がそれを示している。（「百濟禰軍墓誌」は『書紀』天智4年（665）に唐の使節として筑紫に訪れた元百濟の官人の墓誌。この時の宮は近江大津宮だから扶桑は近江朝を意味する。禰軍は678年2月逝去し10月に埋葬された。）



『開聞故事縁起』の「天智10年の太宰府帰還」は「大海人の太宰府避難」

天智の「2つの年次」の太宰府帰還伝承は何を意味するか

一、（天智天皇出居外朝之事）同十年辛未（671）冬十二月三日**《大長元年（704）歴代書年号に无（なし）》**帝、一宝剑を帯び、一白馬に騎り潜に山階山に行幸、終に還御なし。舟波路嶮難を凌ぎ、虚空を馳るごとく、遂に太宰府に臨着、彼の地に御在。月奥を越え当神嶽麓に離宮を営構せむと欲ひ、故に九州諸司に宣旨なり。

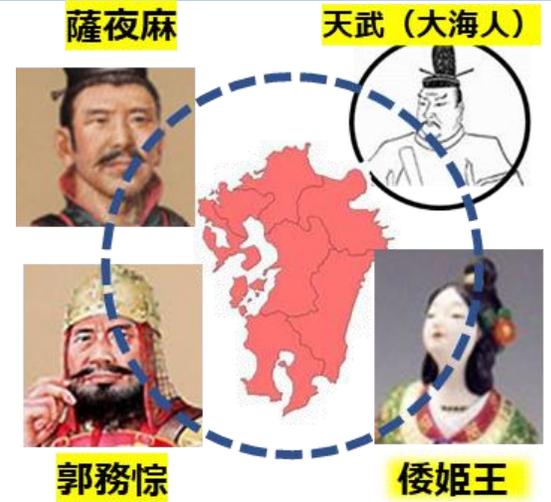
⇒「（天智）10年辛未（671）12月3日」は天智の崩御日。山科で葬られたとされるが、太宰府に帰還し九州諸司に宣旨したという伝承。**崩御した「天智」が太宰府にくるはずもなく、これは天武（大海人）が九州に逃れたと書けないため、「大海人を天智に仮託」したもののか。**

672年3月には九州に郭務悰・唐の都督倭王薩夜麻・倭姫王・大海人がそろい、天智の崩御も確認。5月に大量の武器や衣類が九州諸司から供給され、壬申の乱の幕が開くことになる。

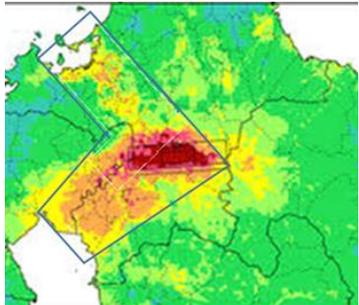
壬申の乱勝利後は唐の軍の駐留の下で薩夜麻が都督倭王として**筑紫都督府と難波宮の2拠点で統治**。天武はヤマトの王家の王（真人天皇）に即位、飛鳥宮で政務を執る。**巨大な難波宮が存在しているのに（焼失は686年）、小さい伝飛鳥浄御原宮でしか統治出来なかったのは、難波宮は薩夜麻の宮で、かつ実力No.1でも天武はその「臣下」だから。**⇒『書紀』の天武2年～末年で外交記事に見える「難波・筑紫・飛鳥」難波約4回・筑紫約35回、飛鳥0回（飛鳥寺約2回）浄御原宮0回。

筑紫大地震と唐の撤退で薩夜麻の倭国（九州王朝）政権は衰退

①唐の撤退（677年ごろ） ②筑紫大地震（678）『書紀』天武7年(678) 12月筑紫国、大きに地動る。地裂くること広さ二丈、長さ三千余丈。百姓の舎屋、村毎に多く仆れ壊（やぶ）れたり。**③686年に難波宮が焼失**。ヤマト主導で藤原宮造営。藤原宮では持統が文武を即位させ、**九州王朝から大和朝廷へと変わる中に薩摩姫の抵抗**が記される。



天武は難波宮で統治出来なかった



『続日本紀』に記す「王朝交代前夜」の「薩末姫の反乱」

700年に「薩摩の姫」が肥後・薩摩の勢力と大和朝廷に抵抗・反乱を起こした

反乱に加わった「衣評」は大宮姫が帰還した薩摩国穎娃(えい)郡・肥人は肥後国・肝衝は大隅国

『続日本紀』文武4年(700)6月3日薩末比売、久売、波豆。衣評督衣君梟、助督衣君弓自美、肝衝難波。肥人等を従へ、兵を持して覓国使刑部真木等を剽劫(おびやか)す。是に於て竺志惣領に勅して犯を決罰す。10月石上朝臣麻呂を筑紫惣領とす。⇒決着はつかず
天智の皇后倭姫王 = 壬申の乱時に薩摩穎娃郡に帰った大宮姫 = 穎娃郡(衣評)で反乱を起こした薩末比売となろう。反乱の範囲は薩摩・肥後・大隅という南九州一円だった。



王朝交代・律令施行に向けた大和朝廷の激しい弾圧があった

覓国使(べっこくし・くにまぎし)は主に九州を律令制に組み入れるために、武器を持たせ派遣した使節
『続日本紀』文武2年(698)4月壬寅、務廣貳文忌寸博士等八人を南の嶋に遣し、国を覓(もと)めしむ。因りて戎器を給ふ。(覓国使は武器を帯びていた)

- (巡察使派遣1) 文武3年(699)3月壬午(27日)巡察使を畿内に遣して、非違(ひゐ)を検(かむが)へ(み)察しむ
- (武装令1) 9月辛未(20日)詔したまはく、「正大式已下無位已上の者をして、人別に弓・矢・甲・楯と兵馬とを備ふること、各差有らしめよ」、又、勅したまはく「京畿、同じく亦これを儲けよ」とのたまふ。
- (「十悪」処罰) 10月甲午(13日)詔したまはく「天下の罪有る者を赦す。但し十悪・強窃の二盗は赦の限に在らず」と。
- (巡察使派遣2) 10月戊申(27日)巡察使を諸国に遣して、非違を検へ察しむ。
- (巡察使派遣3) 文武4年2月壬寅(22日)巡察使を東山道に遣して、非違を検へ察しむ。
- (武装令2) 同年2月丁未(27日)累ねて王臣・京畿に勅して、戎具を備へしむ。

大和朝廷は九州を拠点とする全国的な「反ヤマト政権・反律令施行」武装蜂起を警戒。事前に弾圧していた。

『続日本紀』に記す「王朝交代前夜」の「薩末姫の反乱」

倭国（九州王朝）の反ヤマト（日本国）勢力は大宮姫（倭姫王・薩末姫）を担いで武力抵抗 **「隼人」呼称は無い**

「覓国使」には戎器（武器）が給付されており、双方武器を持つての衝突となる。そして薩摩・大隅・肥後は大宮姫ゆかりの地域、「衣評」は大宮姫が帰還した薩摩額娃郡だから薩末比売とは大宮姫（倭姫王）。天武に即位まで勧められた倭姫王なら倭国の抵抗勢力に担がれるのは当然で、**ヤマト側と大宮姫を担ぐ九州王朝の勢力との間で大規模な武力衝突があった**事は明らか。

ヤマト側は九州王朝内での鎮静化をはかるが、失敗し、外部から力による弾圧に

「犯を決罰」させようとした**竺志**惣領の名は見え、律令施行前の700年だから倭国（九州王朝）が任命した惣領と考えられる。大宮姫（倭姫王）が担がれたなら、最初は九州王朝内で鎮静化させようとしたが、失敗。そこで「首をすげ替え」る。**文武4年10月に筑紫惣領を石上朝臣麻呂に代え新惣領のもと武力平定を目指す。さらに九州に近い周防・吉備の惣領を代え、蝦夷に近い常陸守も新たに任命し反乱に備える。**



701年に大和朝廷は大宝建元・（大宝）新律令により官名・位号を改制

「隼人」と蔑称される

【702年ついに南九州を武力討伐】◆『続日本紀』大宝2年（702）3月27日信濃国、**梓弓一千廿張を献る。以て大宰府に充つ。**（30日）**大宰府に所部の国・郡司等とを銓擬することを聴す。**8月1日、**薩摩・多櫛、化を隔て、命に逆ふ。**ここに、**兵を發し征討し、遂に戸を校（しら）べ、吏を置く。**（16日）正三位**石上麻呂を太宰の師とす。**

9月14日、**薩摩の隼人を討ちし軍士に、勲を授く。**10月3日先に薩摩の隼人を征する時、**大宰の所部の神九処を禱み**祈り、神威に頼りて荒ぶる賊を平げき。唱更（しょうこう）（* 辺境の戍を守る国司）の国司等言さく、「**国内の要害の地に柵を建てて、戍（まもり）を置きて守らむ**」とまうす。許す。（14日）**律令を天下の諸国に頒つ。**

⇒700年に無い「化（王化）命（王命）」の用語が見られ、これは700年と702年の間の王朝交代を表す。九州王朝を「隼人の荒ぶる賊」として武力弾圧し、諸国に律令を強制することが出来たことになる。

武則天による王朝交代承認と「藤原宮の日本国の宮城化」

704年に唐（周）が倭国（九州王朝）にかえ日本国（大和朝廷）を承認

同十年辛未冬十二月三日《大長元年（704）歴代書年号に无（なし）》

「10年辛未」は天智10年（671）だが、大長元年（704）も九州年号「大化10年」にあたる。そして、**日本国（大和朝廷）の粟田真人が唐（武「周」）の武則天（則天武后）の承認を得て帰国した年**にあたる。

◆『旧唐書』（日本国）長安三年（703）、其の（日本国）大臣朝臣真人（粟田真人）来りて方物を貢ぐ。…則天は麟徳殿に宴へたまひ、**司膳卿（しぜんけい）の官を授けて、本国に還す。**（日本国の使人が冠位を得たことは日本国が承認されたことを示す）◆『続日本紀』慶雲元年（704）七月朔。正四位下粟田朝臣真人、唐国より至る。



大和朝廷は「藤原宮」を自らの「帝都（王都）」と定める

始めて藤原の宮地を定むとは

『続日本紀』慶雲元年（704 = 大長元年）11月20日に、**「始めて藤原の宮地を定む。宅の宮中に入れる百姓一千五百五烟（*戸）に布賜ふこと差あり。」**との記事がある。**宮地は692年に定まり、持統は694年末に遷居しており、10年もたつて「始めて～」は不可解。**◆『書紀』持統4年（690）天皇、藤原に幸して宮地を觀す。持統6年（692）藤原の宮地を鎮め祭らしむ。

⇒市大樹説では「造り終えた意味」とするが、住民への恩賜は遷都・天子の遷居時に相応しい。文武は698年に藤原宮で朝賀を受け、大宝元年（701）には藤原宮で外国使節を招いた文武即位の盛大な披露儀式が行われたのにその時でなく704年の恩賜は不可解。◆『新唐書』長安元年（701）其の（日本国）王文武立ちて、大宝と改元し、朝臣真人粟田を遣して方物を貢ぐ。◆『続日本紀』大宝元年（701）正月朔。天皇、大極殿に御して朝を受く。其の儀、**正門に烏形の幢、左に日像・青竜・朱雀の幡、右に月像・玄武・白虎の幡をたつ。**蕃夷の使者、左右に陳列す。文物の儀、是に備れり。（23日）粟田朝臣真人を遣唐執節使とす。3月（21日）対馬嶋金を貢ず。建元して大宝元年とす。始めて新令に依り官名・位号を改制す。

⇒704年の周（唐）による「日本国」の承認により、日本国（大和朝廷）は藤原宮を自らの「宮城と定め」たことを示すもので、**住民への布下賜はこれを告知し祝う行為**だと考えられる。



2016年に藤原宮跡で幢幡を立てた7つの柱穴が見つかり『続日本紀』の記述が確認された。

武則天の承認で、大和朝廷が我が国の代表者になり、藤原宮は私の宮殿となった。祝賀の品を下賜する。



「大長元年」に九州に追放？された最後の倭王と大宮姫（倭姫王）

最後の九州年号「大長」ともう一人の「天智」

大長元年（704）（天智）遂に太宰府に臨着・九州諸司に宣旨す

『開聞故事縁起』の「原文注」に「大長元年（704）歴代書年号に死（なし）」とある。「大長（704～712）」は『中歴』には見えないが、諸資料に九州年号大化以後に存在した年号として記される。①『運歩色葉集』「柿本人丸 者在石見。持統天皇問曰對丸者誰。答曰人也。依之曰人丸。大長四年丁未（707）、於石見国高津死。」②『伊豫三嶋縁起』「天武（*文武）天皇大長九年壬子（712）」⇒大和朝廷は704年に唐の承認が得られるまで旧王朝の天子を藤原宮に留めていたが、その必要が無くなり南九州に追放した、あるいは石上麻呂が704年1月に右大臣に就任した後の筑紫太宰（或いは惣領）に封じたものか。後任の筑紫太宰大伴安麻呂の任用は705年11月で、約2年間の空白。漢最後の皇帝「献帝劉協」は曹丕（魏の文帝）に譲位後山陽公に封じられその地で没した。

『開聞故事縁起』で「天智」とされる人物は706年3月崩御

残存勢力に最早改元できる力はなく大長は続いた

天智の生年は『書紀』に合わせているが没年月日には天智に関する典拠がない。天智の筈はなく最後の倭「王？」か。一、（皇帝、后宫磐隠事）文武帝慶雲3丙未（午）（706）春3月8日天智聖帝天寿79此に崩御。（『続日本紀』には酋帥）大宮姫（倭姫王）も薨去。元明帝和銅元戊申（708）6月18日皇后御寿59薨御。（650年生まれなら年齢は合致）

最後の九州年号「大長」終了時に南九州を武力討伐

「大長」は704年～712年まで続き、713年に途絶える。そして『続日本紀』和銅6年（713）に大隅国の設置と隼人を征つ將軍らへの恩賞記事があるが、なぜか「討伐戦」記事がない。この年倭国（九州王朝）が消滅したことを示す。

◆『続日本紀』和銅6年（713）4月（3日）日向国の肝坏、贈於、大隅、始羅（あひら）の四郡を割きて、始めて大隅国を置く。大倭国疫す。薬を給ひて救はしむ。秋7月（5日）、詔して曰はく、「…今、隼の賊を討つ將軍、并せて士卒等、戦陣に功有る者一千二百八十余人に、並びに勞に随ひて勲を授くべし」とのたまふ。

713年、倭国（九州王朝）の消滅を見届けて大和朝廷は「古事記」を編纂し、歴史の創作に取り掛かった。

旅人の「720年の隼人討伐」は「日本国と倭国の最終決戦」だった

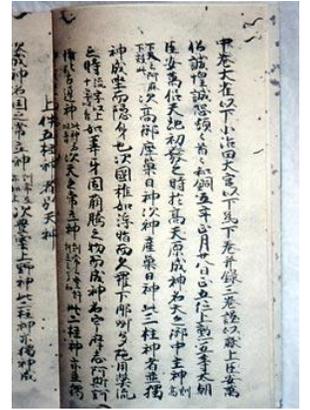
712年の隼人討伐—『古事記』完成

和銅5年（712）太安万侶が『古事記』を編纂し元明天皇に献上。（『続日本紀』に記されず）

和銅6年（713）2月（19日）「度量衡制定」始めて度量、調庸、義倉等類五條事を制す。

5月2日「好字2字令制定」畿内七道諸國郡、郷の名は、好字を著けしむ。

『風土記』編纂令：郡内に生る、銀、銅、彩色、草、木、禽、獸、魚、蟲等物、具に色目に録し、土地の沃瘠、山川原野の名號の所由、又、古老の相傳ふる舊聞異事は、史籍に載して言上せしむ



旅人の指揮した「720年の隼人討伐戦」は「日本国（大和朝廷）」と「倭国（九州王朝）」との最終決戦」だった

養老4年（720）6月兇徒を剪り掃ひ、**酋帥**（しやうすい）面縛せられて、命を下吏に請（こ）ふ。寇党叩頭（かうたうこうとう）して、争ひて敦風（とんふう）に靡く。◆養老5年（721）7月7日征隼人副將軍ら帰還。斬りし首・獲し虜（とりこ）合せて千四百余人。

720年の討伐—『日本書紀』完成

養老4年（720）隼人全面降伏

養老4年（720）5月舍人親王敕を奉りて、日本紀を修む。是に至りて功成りて奏上す。

隼人 = 倭国（九州王朝）勢力は「史書」を持っていた

『続日本紀』の記事によれば、「**山沢に亡命**」していた勢力は「**禁書を挾蔵**」しており、これは「倭国の史書」だと考えられる。

◆和銅元年（708）正月。山沢に亡命して禁書を挾蔵し、百日まで首せずんば、罪に復すること初の如くす。



712年に上程された『古事記』に比べ、わずか8年後の720年に編纂された『書紀』の記事の分量が圧倒的に多く、神功紀の創設や聖徳太子の事績が付け加えられた。これは「倭国の史書」からの剽窃によると考えられる。この『書紀』の編纂とその「公定」により、大和朝廷の歴史改ざんは達成され、今日まで歴史の通説の拠り所となっている。12